

## 資料

## 向社会的行動尺度 (中高生版) 作成の試み

横塚 怜子\*

AN ATTEMPT TO CONSTRUCT A SCALE OF PROSOCIAL BEHAVIOR  
FOR HIGH SCHOOL STUDENTS

Reiko YOKOTSUKA

Twenty items to be used in assessing the individual differences in the prosocial behavior of high school students were selected through item analysis. The factor analysis of these items indicated that there were five factors: 1) helping other family members, 2) social service and donations, and three other factors concerned with helping friends, 3) behavioral situations, 4) learning situations, and 5) psychological situations. The score of this scale related positively to the score of the benevolence value and negatively to that of the independence value; the score related positively to the empathy scale, self-consciousness scale, self-monitoring scale and social skill scale. This scale was also validated through peer rating as well as through the data on help in the home. Although no great differences were found between junior and senior high school students, significant differences were seen between male and female students, and between students from different school climates.

Key words: prosocial behavior, high school student, factor analysis, scale validity, sex difference.

## 問 題

向社会的行動 prosocial behavior についての発達の研究は、就学前期から12歳あたりの年齢を対象にしたものが多く (Radke-Yarrow et al, 1983, 菊池, 1984), 幼児期前期や青年期についての研究は少ない。このことの理由にはさまざまなことが考えられるが、青年期についていえば、この時期に適した向社会的行動尺度が作成されていないことが、そのひとつの理由である。Rushton (1984) は20項目からなる自己報告式の愛他行動尺度を作成しているが、これは成人を対象としたものである。この愛他行動尺度にヒントを得て、菊池 (1986) は同じ20項目から構成された向社会的行動尺度 (大学生版) を作成した。

ここでは、これらの尺度を参考にしてあらたに構成し

た向社会的行動尺度 (中高生版) の作成過程と、そのことにかかわって収集された資料のいくつかを報告する。

## 尺度の構成

中・高生が現に行っている向社会的行動を収集するために、中学生140名 (男子40名, 女子100名) と高校生171名 (男子46名, 女子125名) を対象にして、「これまでに行ったことのある思いやりのある行動」を5つ挙げてもらった。こうして収集された項目を、向社会的行動についての4つの基準 (菊池, 1984) を手がかりに整理した結果、85項目の向社会的行動が得られた。ここでいう4つの基準とは、その行動が相手に対する援助であること、外的報酬を目的としないこと、ある種のコスト (損失) を伴っていること、そしてそれが自発的になされるものであることである。内容的にみると、これらの項目は学校・家庭・社会での向社会的行動に分かれる。その多くは、身近な人達 (家族や友人など) を相手としたものであった。

\* 桜の聖母学院中学校 (Junior High School of Sakura no Seibo Gakuin)

TABLE 1 尺度項目と因子分析の結果

項 目	I	II	III	IV	V	h <sup>2</sup>
1. 家族のものがぐあいの悪いとき、看病した。	.42	.26	.39	.02	.15	.42
2. 友達がけがをしたり、病気の時、手当てをした。	.16	.66	.24	-.01	.29	.61
3. コーヒーやお茶を入れて家族をいたわった。	.64	.07	.25	.06	.07	.47
4. 友達の荷物をもってやったり、傘に入れてやった。	.14	.59	-.02	.14	.19	.43
5. 家族のお祝いの日や誕生日などにプレゼントをした。	.49	-.12	.46	.13	.21	.52
6. 家族のために部屋を暖かくした。	.60	.22	.13	.05	.17	.46
7. 歳末助け合いに協力した。	.10	-.01	.67	.11	.04	.47
8. まわりの人に元気に挨拶をしたり、話しかけたりした。	.09	.20	.39	-.04	.46	.41
9. 苦しい立場にある友達を親身になって助けた。	.10	.42	.26	-.03	.61	.63
10. 家族のためにお風呂をわかってやった。	.67	.23	-.09	.05	-.11	.52
11. インドやアフリカを助ける募金に協力した。	.14	-.02	.70	-.07	.32	.61
12. 母親の手伝いをした。	.64	.21	.23	-.13	.05	.52
13. 兄弟(姉妹)が困っているとき、手をかしてやった。	.39	.16	.07	.42	.16	.39
14. 友達の悩みを聞いてやったり相談相手になった。	.11	.24	.08	.14	.71	.60
15. 休んだ友達にノートを貸した。	-.02	.02	-.05	.74	.28	.63
16. 友達に勉強を教えてやった。	.01	.24	.27	.73	-.07	.66
17. バザーや廃品回収に協力した。	.11	.37	.55	.25	-.06	.51
18. 家の掃除や片付けをした。	.65	-.24	-.02	.07	.36	.66
19. 他人の失敗を笑ったりしないで励ましてやった。	.15	.16	.07	.26	.65	.54
20. ゲームやスポーツのルールを教えてやった。	.13	.60	-.02	.19	.18	.45
$\Sigma a^2$	2.78	1.97	2.15	1.52	2.09	10.51
$\Sigma a^2/20$	.14	.10	.11	.08	.10	.53

(注) 太数字=0.40以上

N=400(男女各200)

この85項目について、中学生96名(男子62名, 女子34名)と高校生123名(男子86名, 女子37名)を対象に、「やったことがない」「1度やった」「数回やった」「しばしばやった」「いつもやった」の5件法で回答を求めた。この回答をもとに、中・高生別と全体とについて、得点の高い者・低い者それぞれ27%をとり出して上・下位群を構成し、項目ごとの弁別指数(D)\*を計算した。この弁別指数がいずれのグループでも高く(0.3以上)、グループ間でこの指数の差の少ない(0.1以下)項目を選んだ。こうして構成されたのがTABLE1にみられる20項目の尺度で、向社会的行動尺度(中高生版)と名付けることとした。この尺度でも回答は上記の5件法で求め、得点は「やったことがない」に0、「いつもやった」を4とした。最高可能得点は80になる。

### 尺度の検討

**因子分析** この尺度を中学生200名(男女各100名)と高

\* 弁別度指数(D)は次式で求めた。

$$D_j = \frac{1}{N}(N_{uj} - N_{ej})$$

$N_{uj}$ ,  $N_{ej}$ は上位・下位群で「しばしばやった」「もっとやった」者の人数(池田 1973)

校生200名(男女各100名)に実施した結果について、因子分析を行った(主因子解, バリマックス法による直交回転)。その目的は、この尺度の内容を整理して理解するためである。TABLE1にはこの結果(因子負荷量)も示してある。得られた因子は5因子で、その説明量は53%になる。なお、中・高生別、男女別にも同じ手法で因子分析を行ったが得られた結果はほぼ同じ傾向のものであった。

因子負荷量0.4以上の項目を手がかりにして、因子の解釈を試みた(カッコ内は因子負荷量)。第I因子には、「家族のためにお風呂をわかってやった」(.67)「コーヒーやお茶をいれて、家族をいたわった」(.64)「母親の手伝いをした」(.64)など、いずれも家族を相手とした向社会的行動の項目に高い負荷量がみられる。第II因子では、「友達がけがをしたり、病気の時手当てをした」(.66)「ゲームやスポーツのルールを教えてやった」(.60)など、友人への行動的援助を内容としている。これに対して第III因子は、「インドやアフリカを助ける募金に協力した」(.70)「歳末助け合いに協力した」(.67)といった寄付や奉仕にかかわる項目で負荷量が高くなっている。第IV因子は、「休んだ友人にノートを貸した」(.74)「友人に勉強を教えてやった」(.73)などで友人への学習面での援助が主なるものである。「友人の悩みを聞いてやり相談相

手になった」(.71)「他人の失敗を笑ったりしないで励ましてやった」(.65)「苦しい立場にある友達を親身になって助けた」(.61)などに負荷量の高い第V因子は、友人への心理的援助として解釈できる。中・高生の向社会的行動は友人を相手としたもの(第II・IV・V因子)が多く、家族を相手としたもの(第I因子)がそれについている。寄付や奉仕といったよりひろい向社会的行動についてのもの(第III因子)は、項目数も少なく説明量も小さくなっている。このことは、はじめに収集された項目のもつ傾向からくることである。

**信頼性の検討** 尺度を前半と後半に分け、中学生の247名(男子126名, 女子121名)の資料について折半法で求めた信頼性係数は0.77(Kuder-Richardson 公式による修正値は0.87)であった。この尺度がかなり高い内部一貫性をもっていることがわかる。また、同じ中学生247名について、2週間々隔での再テスト法で算出した信頼性係数は0.84という高い値を示した。この尺度が高い安定性をもつといえる。いずれの場合についても、信頼性係数の性差はみられなかった。

**他の尺度との関係** この尺度の妥当性を検討するために、他のいくつかの尺度と一緒に同じ対象に実施して考察した。結果はTABLE 2にまとめられている。

対人的価値尺度(ゴードン・菊池, 1981)との関係は、男子高校生255名の資料について検討された。この尺度は、対人関係でわれわれが重視している価値を測定しようとするものである。TABLE 2にみられるように「他の人のためになることをしようとする」博愛的価値とは正の(0.21,  $p < .05$ )、「自分のことは自分で決めたい」とする独立的価値とは負の(-0.19,  $p < .05$ )関係が認められた。対人的価値の傾向と本尺度で測定される現実の向社会的行動との間には、あるズレがあると考えられる。博愛的価値との関係にはこのことが反映しているし、独立

的価値を重視する者は他人にもそのことを求める傾きがあると考えられるから、この結果は妥当なものといえる。

情動的共感性尺度(加藤・高木, 1980)は感情的暖かさ(相手の立場に立って同じ感情を体験できる)・感情的冷淡さ(相手の立場に立っての情動的な共感が体験できない)・感情的被影響性(他人の感情によって左右される程度)の3尺度から構成されている。女子高生225名の資料についてみると、本尺度との関係は予想通りで、感情的暖かさとはプラス(0.35,  $p < .01$ )感情的冷淡さとはマイナス(-0.34,  $p < .01$ )の相関関係がみられた。感情的被影響性との関係は有意ではなく、向社会的行動をより多くとる者は、相手の情動の変化に巻き込まれることの少ない傾きがあるといえる。共感性には一般的なそれと、より具体的な相手の置かれた状況についてのものと考えられる。斎藤(1986)は、15項目からなる障害者に対する共感性尺度(佐藤, 1982)との関係を調べている。本尺度とこの共感性尺度とを女子高校生131名に実施した結果から、この2つの尺度の間で0.30( $p < .01$ )の相関係数が得られ、向社会的に行動する者は障害者に対しても高い共感性を示すことが明らかであった。

自己に注意が向く程度を問題とした自意識尺度(菅原, 1984)は、自己の内面に注意を向ける程度(私的自意識)と他者から観察される自己の側面に注意を向ける程度(公的自意識)との2つの側面に分けて、それを測定しようとしている。高校生225名(男子141名・女子84名)についての資料では、このいずれの側面においても向社会的行動との関係は明らかで、このタイプの行動を多くとる者は自己に注意が向く程度が高いといえる。自分の行動に関心があるだけでなく、その行動が他人に与える効果にも注意が向くのである。男女別に計算した相関係数も、これと同じ傾向を示した。

セルフ・モニタリング尺度(岩淵・田中・中里, 1982)は、この自意識とよく似た傾向をとりあげたもので、「周囲の状態や他者の行動に基づいて、自己の表出行動や自己呈示が社会的に適切かどうかを観察し、自己の行動を統制すること」を問題としている。女子高校生220名の資料では、0.27( $p < .01$ )の相関係数が得られており、向社会的に行動する者は自己モニタリングの傾向をもつといえる。公的自意識についてみられたと同じことがこの場合にもいえるわけで、自己の行動がどのような効果を生むかということにやや関心が向くようである。

高校生210名(男子104名, 女子106名)を対象に、本尺度と社会的スキル尺度(堀元, 1985)とを実施した結果もTABLE 2に示されている。社会的スキルとは、「どんな人物にも好かれるように、自分が積極的に関与したくない

TABLE 2 他の尺度との関係(r)

対人的価値尺度 (n=255)		障害者への共感性尺度 (n=131)	
支持的	-.12		.30**
同調的	.06	自意識尺度 (n=225)	
承認的	-.14	公的自意識	.40**
独立的	-.19*	私的自意識	.46**
博愛的	.21*	セルフ・モニタリング尺度(n=220)	.27**
指導的	.09		
情動的共感性尺度 (n=225)		社会的スキル尺度 (n=210)	
感情的暖かさ	.35**		.40**
感情的冷淡さ	-.34**		
感情的被影響性	.15**		

(注) 対象はいずれも高校生。

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

場面でも、相手に応じた行動様式を取り得る」ことをいうとされている。この2つの尺度の間には0.40 ( $p < .01$ )という高い相関関係がみられ、向社会的に行動する者は社会的スキルの点でもすぐれていることが明らかである。この点については性差はみられなかった。

**その他の資料** 生徒達が日頃体験する5つの場面についての仲間評定との関係をみた。この場合、「忘れものをした時、自分のものをよく貸してくれるのはだれですか」「悪口をいわれている友人をいつもかばってくれるのはだれですか」「仲間はずれにされている友人をく仲間に入れてあげよう」と言い出すのはだれですか」「勉強のわからないところをいつもよく教えてくれるのはだれですか」「からだのよわい友人や困っている友人の世話をよくしてくれるのはだれですか」の5項目に、それぞれ名前が挙げられた回数を得点とした。男女の中学生247名についての結果は0.27 ( $p < .01$ )の相関係数を示している。仲間から思いやりがあるとして名前が挙げられることの多い者はこの尺度の得点が高い傾向があるといえる。この点について、男女別に計算した結果はいずれも有意であった。

吉田(1986)は、中学生159名(男子68名,女子91名)を対象にして、本尺度とお手伝いをしている程度やその種類数、お手伝いを始めた時期との関係を報告している。いずれの場合も、上・下位群の本尺度についての得点の平均値を比較したが、TABLE 3にみられるように、上位群の平均値が下位群よりも高いことが確かめられた。向社会的行動を多くする者は、お手伝いを毎日することが多く、その種類も多い。また、そのお手伝いを早い時期から始めているといえる。

TABLE 3 お手伝いとの関係(吉田, 1986)

		n	$\bar{X}$ (SD)	t-test
お手伝いの程度 <sup>a)</sup>	上位群	78	46.54(12.81)	t=2.77**
	下位群	81	34.37(13.43)	
お手伝いの種類 <sup>b)</sup>	上位群	79	46.54(15.23)	t=1.96*
	下位群	80	34.21(16.19)	
お手伝いを始めた時期 <sup>c)</sup>	上位群	79	45.52(14.25)	t=2.09*
	下位群	80	35.22(13.57)	

(注) a) 「毎日必ずしている」「ほとんどしている」が上位群(5段階評定)。

b) お手伝いの種類11以上が上位群。

c) よくしているお手伝い3つについて「小学1・2年」以前からしていた者が上位群。

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

## まとめ

今回あらたに構成した20項目の向社会的行動尺度(中

高生版)について、その信頼性と妥当性を検討してきた。折半法と再テスト法とによる信頼性の資料は、一応の水準のものであった。本尺度と対人的価値尺度、情動的共感性尺度、障害者への共感性尺度、社会的スキル尺度などとの関係は、いずれも理論的に妥当なものであった。また、本尺度の得点と仲間評定との間にもプラスの関係がみられたし、お手伝いについての調査結果とも予想されたような関係があった。

現在までに入手されている資料でみるかぎり、この尺度の得点の平均値には一貫した学年差や中・高生間での差は認められない。これに対して性差はきわめてはっきりして男子中・高生596名と女子中・高生931名についての平均値と標準偏差(カッコ内)は、それぞれ40.29(11.65)と51.18(10.37)であった。その差は10.89は統計的に有意のもの( $t=28.13$ ,  $p < .001$ )で女子の方が男子よりもよりつよい向社会的傾向をもっているといえる。また、この尺度の平均値の学校差も大きく、たとえば同じミッション系の高校であるにもかかわらず、女子生徒だけのA学院と共学のB学院の女子生徒との間には大きな差があった。A学院生225名とB学院生84名との平均値と標準偏差(カッコ内)は、それぞれ53.95(8.98)と46.99(9.96)であって、その差は(6.96)統計的に有意( $t=9.14$ ,  $p < .01$ )であった。こうした違いが何に起因するものかの検討は今後の問題であるが、この点を含めて、本尺度を用いての資料収集をさらに続けていきたい。

## 追記

本論文は、1986年に福島大学大学院学校教育科に提出した修士論文「青年期における向社会的行動の研究」の資料の一部をまとめたものである。資料の収集についてご協力下さった福島第一中学校、岳陽中学校、信夫中学校、福島県立福島高校、福島女子高校、福島北高校、安達高校、川俣高校、私立聖光学院高校、桜の聖母学院中学校、高校の先生方、生徒の皆さんにお礼を申し上げる。

## 引用文献

- 堀毛一也 1985 自己モニタリングと社会的スキル 東北心理学会39回大会口頭発表
- 池田央 1973 「テストII」続・八木(監修)心理学研究法 第8巻, 東大出版会 242-247.
- 岩淵千明・田中国夫・中里浩明 1982 セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究, 53, 1, 54-57.
- 菊池章夫 1984 向社会的行動の発達 教育心理学年報 23集 118-127.

- 菊池章夫 1986 思いやりを測る こころの科学 No.8, 22—27.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33—42.
- ゴードン, L. V.・菊池章夫 1981 増補版 価値の比較社会心理学 川島書店
- Radke-Yarrow, M., Zahn-Waxler, C., & Chapman, M. 1983 Children's prosocial dispositions and behavior in P.H. Mussen (ed.) *Handbook of Child Psychology*. 4th ed. Vol. 4, Wiley, 469—545.
- Rushton, J.P. 1984 The altruistic personality. in E. Staub & *et al.* (eds.) *Development and Maintenance of Prosocial Behavior*. Plenum Press, 271—290.
- 斎藤宏美 1986 対人関係の発達の研究 福島大学教育学部卒業論文（未発表）
- 佐藤百合子 1982 交流学习についての研究 福島大学教育学部卒業論文（未発表）
- 菅原健介 1984 自意識尺度 (Self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 3, 184—188.
- 吉田真紀子 1986 向社会的行動についての一考察 福島大学教育学部卒業論文（未発表）

(1988年7月25日受稿)